

「スジチャダイゴケ (2)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

キノコというのは、菌類が胞子を拡散するためだけに「一時的に」つくる「子実体」である。それぞれの菌種は、さまざまな胞子の拡散方法を「考案」し、それを世に「発表」している。キノコは、それぞれの胞子拡散方法に合った形状をしているので、実に多様性に富んでいるのだ。ほとんどの菌類は、大量の胞子をつくり、風によって拡散させている。



しかし、たとえば左図の「サンコタケ (三鈷茸)」は、3本爪の内側に、粘液質の胞子をつける。その粘液に悪臭があり、ハエに胞子を運んでもらっている。

多くの菌類の子実体の中でも「スジチャダイゴケ」の胞子拡散方法は、群を抜いて変わっている。「風媒菌」でも「虫媒介菌」でもなく、「雨媒菌」(正確には「雨滴媒菌」)なのである。

私は、郊外園を管理している方に、虫プラケースをもらって、「スジチャダイゴケ」を土(菌糸)ごと採集して、理科室に持ち帰った。生きたままの状態を観察し、その後、成長も見なかったからである。



私は、郊外園を管理している方に、虫プラケースをもらって、「スジチャダイゴケ」を土(菌糸)ごと採集して、理科室に持ち帰った。生きたままの状態を観察し、その後、成長も見なかったからである。



(左) は子実体の1つを切り取って拡大撮影したものだ。漏斗状の形状から「茶台ゴケ」の名がついたのだろう。菌体は革質で強靱、弾力性にも富む。質感としては「キクラゲ」のそれに近い。切断しようとしても、カッターの刃もなかなか受け付けないほどだった。



苦労して「たて割り」にした写真である。中に、黒豆のような粒が、たくさん入っている。実はこの中に胞子がたくさん詰まっているのだ。スジチャダイゴケが変わっている点は、この胞子の拡散方法にある。漏斗状の菌体で雨滴を受け止め、その衝撃で、胞子袋を飛ばすらしい。私はスポイトで一滴落としてみた。一気に3~4粒が飛び出し、10cmほどの範囲に飛び散った。その後、袋の基部についた粘着性の細毛で、動物や虫に付着するらしい。他にも方法はあっただろうが、これが進化の結果。まったくスゴすぎる!